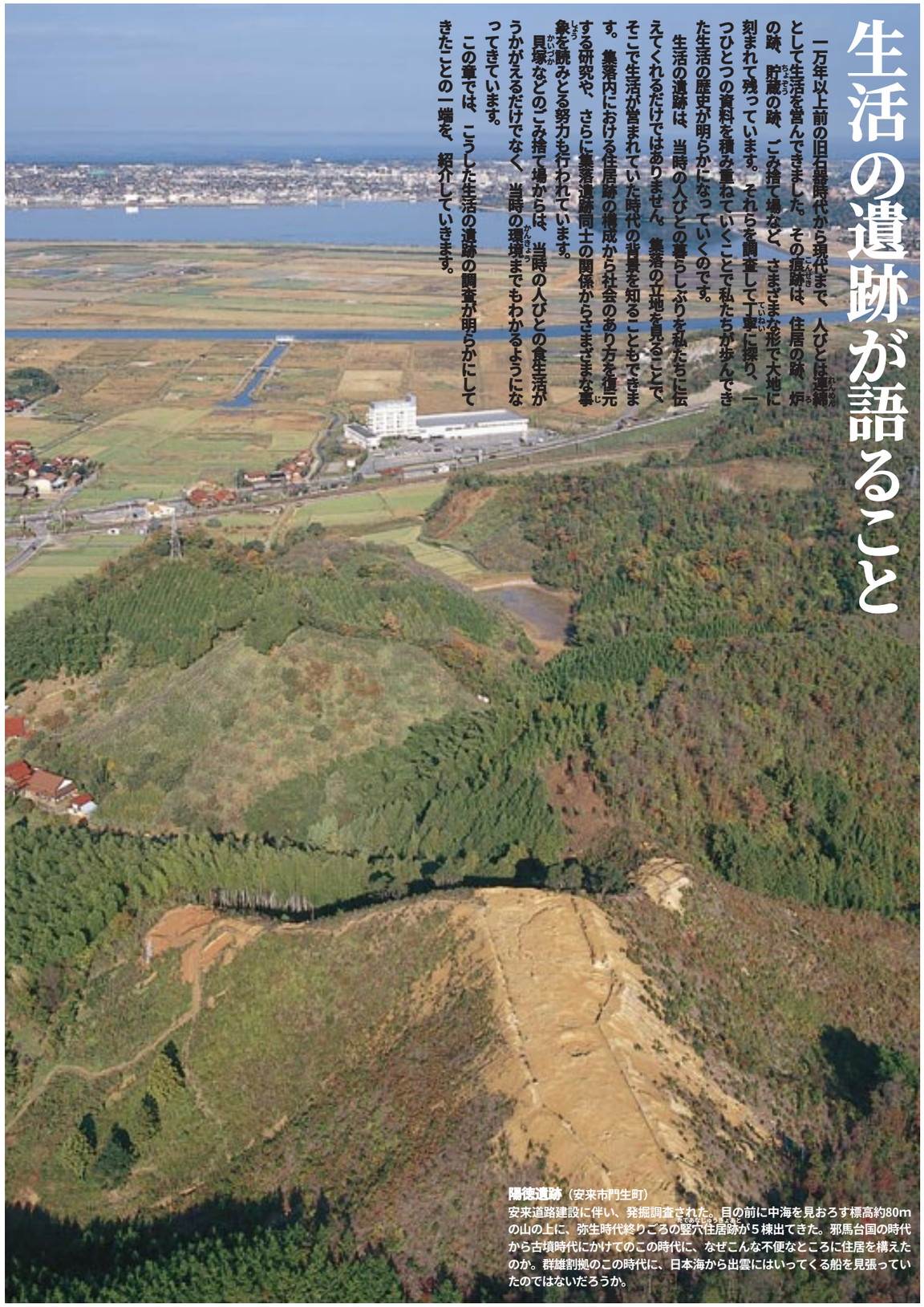
生活の遺跡が語ること

一万年以上前の旧石器時代から現代まで、人びとは連綿として生活を営んできました。その痕跡は、住居の跡、炉の跡、貯蔵の跡、ごみ捨て場など、さまざまな形で大地に刻まれて残っています。それらを調査して丁寧に探り、一つひとつの資料を積み重ねていくことで私たちが歩んできた生活の歴史が明らかになっていくのです。

生活の遺跡は、当時の人びとの暮らしぶりを私たちに伝えてくれるだけではありません。集落の立地を見ることで、そこで生活が営まれていた時代の背景を知ることもできます。集落内における住居跡の構成から社会のあり方を復元する研究や、さらに集落遺跡同士の関係からさまざまな事象を読みとる努力も行われています。

貝塚などのごみ捨て場からは、当時の人びとの食生活がうかがえるだけでなく、当時の環境までもわかるようになってきています。

この章では、こうした生活の遺跡の調査が明らかにしてきたことの一端を、紹介していきます。



陽徳遺跡（安来市門生町）
安来道路建設に伴い、発掘調査された。目の前に中海を見おろす標高約80mの山の上に、弥生時代終りごろの竪穴住居跡が５棟出てきた。邪馬台国の時代から古墳時代にかけてのこの時代に、なぜこんな不便なところに住居を構えたのか。群雄割拠のこの時代に、日本海から出雲にはいってくる船を見張っていたのではないだろうか。

弥生時代後半、島根は緊張状態にあった
…集落の立地やあり方が明らかにした争乱の歴史…

一九九四年、標高八〇メートル、両側が屏風のように切り立った山の頂上から、弥生時代終りごろの竪穴住居跡が出てきました。これが、安来道路建設に伴って発掘調査された陽徳遺跡です。

中海と日本海を眼下に望むこの地に住居を作る理由は、出雲への侵入者を見張る以外は考えられません。「高地性集落」と呼ばれるこうした集落は、弥生時代の後半には西日本全域で作られていましたが、島根県内で高地性集落とはっきりわかるものが見つかったのは、これが初めてのことでした。

これを機に、それまで調査された県内の集落遺跡を見直してみると、陽徳遺跡と同じ時期に限って、比較的高い丘陵の上に住居を構えた例がたくさん出てきました。そこから、やはり見張りや危急の情報伝達のための集落があったのではないかとも考えられています。

同じころ、神戸川を遡った山間の地である頓原町森Ⅲ遺跡から、溝で囲まれた集落（環濠集落）が発見されました。ここからは、鉄の矢じりなどの武器も出ました。集落を囲む溝は、ムラを守るためのものとも考えられ、そうだとしたら、このような山間地まで争いの影響が及んでいたことになります。同様の溝は、出雲市の天神遺跡や益田市安富羽場遺跡でも発見されました。

弥生時代の後半は、中国の歴史書『魏志』倭人伝に「……倭国乱れ、相攻伐して年を歴たり。」と記されたように、日本の広い範囲で戦いが行われていた時代でした。しかし島根県では、そうした証拠となる高地性集落や環濠集落が長いあいだ見つかっていなかったため、例外的に平和な地ではなかったかとも言われていました。それが一つの遺跡の発掘調査を機に、島根も戦乱に巻き込まれていた様子が一気に浮かび上がってきたのです（詳しくは二巻を参照）。

堀をめぐらした集落

森Ⅲ遺跡（頓原町八神）
神戸川が作った河岸段丘上にある、島根県では珍しい弥生時代後期の環濠集落(周りを堀で囲んだ集落)。鉄の矢じりなどの武器も出ており、防御的性格を持つ集落だったと思われる。古墳時代や奈良時代の住居跡も出ており、住居跡は全部で100軒以上もあった。隣接して同じ集落遺跡である森Ⅲ遺跡、森Ⅱ遺跡が続き、山間部随一の大遺跡である。

天神遺跡（出雲市天神）
弥生時代から現代まで、ずっと集落が営まれた大規模な遺跡。市街化に伴い、住宅、道路、鉄道などの建設でしだいに姿を変えていっている。鉄道建設の際の調査では弥生時代の環濠集落も出てきた。

安富羽場遺跡（益田市安富）
弥生時代中ごろの、堀をめぐらした環濠集落が見つかった。

高い山の上の集落

安来市の見晴らしのよい山の上では、弥生時代の終りごろの住居跡がしばしば発見されます。陽徳遺跡の発見を機にこれらを見直すと、見張りや通信機能を持つ集落であった可能性がクローズアップされてきました。

宮内遺跡（安来市宮内町）

普請場遺跡（安来市島田町）

大原遺跡（安来市佐久保町）

猫の谷遺跡（安来市黒井田町）

岩屋口北遺跡（安来市佐久保町）

臼コクリ遺跡（安来市佐久保町）